

【いい俳句とは】

いい俳人、とは、いい俳句をつくるひとのことである。当り前のことだ。

しかし、いい俳句とはどんな俳句か、という見極めは、それほど安直なものではない。好いた風な、いいらしい俳句、それは誰にでも見える。

【俳人とは】

俳人は、一見素直だが、素直なひとというのは、生得の智恵とは、また、ひと味違った鋭さを秘めているものだ。嘗めない方がいい。

【結社について】

私は、俳句結社には、さまざまな様態があつていいと思つている。季語がなければ俳句と認めない、いや、季語はもともと不安定なものだ、無闇に拘泥する必要はないと。そんなことは、さして論難しあうほどの大事ではあるまい。妙な指導者意識を離れたら、おのずから解決することである。要は、ひとのところに沁みる作品であるかどうか、というだけのことだろう。

【結社誌の肝に置くべきこと】

俳句は、いつてみれば決断の文芸である。政治に奔走することを好まぬ女性が、たまたまその点に共感をおぼえたことが、私は、女性俳句隆盛の最大要因であつたと思う。電気

掃除器もプロパンガスも、いまはもう全く関係のないことである。まして、それを衆愚と見誤つたら、容易ならぬこと。この点は綜合誌よりもむしろ、結社誌の肝に置くべきことではないか。

【結社と綜合誌と】

俳句の結社もまた、政治の小結社に似たところがあるが、衆愚衆賢に問題をしぼるなら、共に公的な存在といつても、結社誌（あるいは同人誌）と、いわゆる綜合誌と称する商業雑誌とでは、その責任において、比較にならぬほどの軽重がある。衆愚に甘え、衆賢を念頭にしない綜合誌は、まつとうな俳句の進展を阻む。これまたその功罪は、結社誌などの遠く及ぶところではないのだ。

【綜合誌の眼力】

卒直にいつて、いまの俳句綜合誌は、雑誌の主宰者のみを尊重し過ぎるようである。かりに発行部数を念頭にしての方便というなら、効果は逆だろう。いつか綜合誌の魅力と權威を薄めて、群小の俳誌の出現をうながすばかりだ。主宰者であろうとなかろうと、これはと思われる俳人は執拗に押し上げたらい。つまり編集者は、部数にこだわる前に作家にこだわるのが常道。その眼力が適つたとき、おのずから部数は伸びる。

【時評・月評の評価の基準】

総合誌・結社誌、ともども、時評とか月評と称する欄がある。短歌・俳句界特有の現象だろう。別に悪いことではないが、しばしば筆者自身の眼の在りどころ、あるいは評価の基準が、なにがなにやら、見当もつかぬあいまい模糊としたものがある。

【選句という好奇心】

俳句や短歌は、小説などちがつて、実作は必ずしも年齢に支配されない。老艶などという言葉がある通り、老境には老境のよろしさがあつて、それはそれなりの風味を宿す。だが、選句はそうはいかない。なによりもまず旺盛な好奇心が最大の要件である。好奇心とは、単に珍しい作品を見出すというのではなく、共感のなかにおのれを超える力を見出すことだ。

【大衆文芸としての俳句】

目盛りを持たないひとつが、勝手にひとの作品を計量するというのは、随分といい気なものにちがいないが、しかし、俳句は、誰がどう解し、どう評価しようと、そのあたりは浩大無辺。そこに大衆文芸たる要素もあるのだが、ただ、そのような場合でも、したり顔だけはするな。

【女性俳句の時代】

現今は、女性俳句の時代だ、という。現象的には、正にその通り。なんの異議もない。

ただし、私は、俳句という詩型は、飽くまで男性的な性格を持ったものと確信している。女性俳人が男性俳人を凌駕したのは、男性の側が女性化し、女性が男性的な俳句の性格に深く共鳴した結果ではないか。

